2024 年 2 月

さくら　別冊

NNPO 法人相模原アレルギーの会

～感謝～

新年の挨拶

NPO 法人相模原アレルギーの会理事長

長谷川眞紀

明けましておめでとうございます。

NPO 法人相模原アレルギーの会としてのご挨拶はこれが最後となります。

相模原アレルギーの会は 1990 年に発足し、発足当時は任意団体として、故岩瀬会長のひとかたならぬお世話により、アレルギー疾患、特に気管支ぜんそくの病態、治療についての知識を広めようと講演会を中心とする活動を行ってきました。講演会場も最初は国立相模原病院（当時）の研究棟 3 階のホールを使っていましたが、職業訓練校に移り、200 人近い聴衆を集めておりました。また機関誌として 1991 年から「さくら」を発行してきました。

第 34 回講演会　金メダリストスピード清水氏との鼎談にて。

振り返ればアレルギー診療の現場は当時とは様変わりしています。私は 1973 年に医学部を卒業し、2 年の初期研修の後アレルギー診療を専門として参りました。物療内科に入局後すぐに国立相模原病院に派遣され 2 年を過ごしました。当時のアレルギー科の病棟はぜんそく患者さんであふれており、他科のベッドを借りて入院患者さんを診療していました。しかも長期入院患者さんが非常に多く入院されていました。その後いったん大学に戻り 1985 年に再度赴任しましたが、その頃から「ぜんそくは炎症性疾患である」という認識が徐々に広がり、吸入ステロイドが利用できるようになったことと吸入ステロイドの使用を強力に勧めるガイドラインの普及とともにぜんそく患者さんのコントロールは格段の進歩を見せました。現在では吸入ステロイド単剤に加え、吸入ステロイド/長時間作用性ベータ刺激薬の合剤、さらにはそれに長時間作用性抗コリン薬を加えた三剤合剤も利用できるようになりました。これでも改善が十分ではない患者さんには生物学的製剤が利用でき、以前のようにぜんそく発作で長期入院するという患者さんはいなくなりました。今では成人ぜんそく患者さんの寛解の可能性さえ提唱されています。

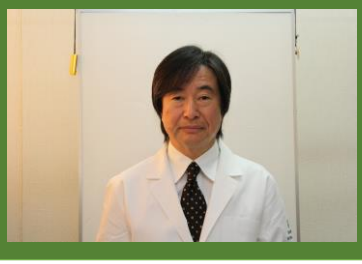
相模原アレルギーの会は 2010 年に NPO 法人となり活動を続けて参りましたが、2020 年からの新型コロナのパンデミックもあいまって講演会の参加者が、激減しました。ネット中継とのハイブリッド開催も試みましたがそれでも少人数の参加にとどまりました。また会員数の減少に伴い、理事会の高齢化も進み、新規会員の勧誘等試みましたが挽回するに至っておりません。ぜんそく患者さんの QOL の改善もめざましいものがあり会としては一定の役割を果たし終えたのではないかと考えます。理事の体力が残っており会の後始末がきちんとできるうちに NPO 法人としての活動に終止符を打つことになりました。

長い間ありがとうございました。御礼申し上げます。

挨拶

国立病院機構相模原病院　病院長

安達　献



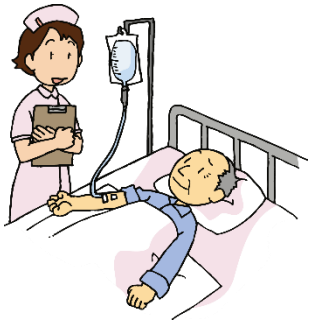
新年あけましておめでとうございます。

昨年 12 月に令和 6 年 3 月をもって相模原アレルギーの会の活動終了のお手紙が届きました。

相模原病院のアレルギー部門並びに研究センターは、相模原アレルギーの会を中心とした患者さん達の御理解と大いなるバックアップによって発展してまいりました。お陰様で平成 29 年 4 月にはアレルギー疾患対策拠点病院に指定されるまでとなり、改めて深く感謝申し上げます。

「さくら」が届くのも大変楽しみにしておりました。私は物心がついた頃から小学校 4 年生頃まで小児喘息に苦しみました。父が呼吸器内科の専門医だったため命は助かりましたが、当時は対療法しかなかった時代で、毎晩のように起こる喘息発作の恐怖と息を吐けない苦しみから『死』を意識したことは一度や二度ではありませんでした。その後も 30 歳で喘息の再発、32 歳でアワビの醤油煮摂取によるアナフィラキシーショック（酸化防止剤による）、5 年前と 2 か月前の赤ワイン摂取によるアナフィラキシーショック（酸化防止剤による）、8 年前の汗による自家感作性皮膚炎に対して受けたステロイド大量療法と、相模原病院に勤めながら心強い病院スタッフのお世話になりながら院長職を務めている次第で、「さくら」を読んで情報収集させていただいておりました。

研究センターの人事においては令和 4 年 10 月に福冨友馬先生が臨床研究推進部長に、令和 5 年 4 月に佐藤さくら先生がアレルギー性疾患研究部長に昇任され、同年 7 月には前臨床研究センター長だった谷口正実先生が、特任院長補佐（臨床研究担当）として復帰頂けたことで、海老澤元宏研究センター長の元で更なる体制強化を図ることが出来ました。



「アレルギー疾患に対して受け身であってはならない。病気を知り、薬を知り、対処法を知って自己管理を実践すれば、アレルギー疾患患者さんの多くは健常者と変わらない生活ができる。」との秋山一男先生のお言葉は、相模原アレルギーの会の皆様の絶大なるサポートもあってほぼ達成出来たと思います。秋山先生の遺されたお言葉が継続して叶うよう相模原病院と致しましても、アレルギー疾患についての患者さんが web 参加可能な講演会の企画や YouTube での啓蒙活動を推し進めていければと考えております。

皆様が灯してくださった燈火を決して絶やさぬよう最善を尽くします。

34 年にわたる活動、お疲れさまでした。そして誠に有難うございました。

相模原アレルギーの会のスタッフの皆様のご多幸を祈念しております。

国立病院機構相模原病院臨床研究センター
谷口　正実（特任院長補佐、特任研究部長）

新年にあたり、元旦の能登半島地震によりお亡くなりになられた方々に謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被災された皆さまに心からお見舞い申し上げます。

患者会の功績に感謝

本患者会が解散するとのお知らせをいただき、驚きと無念さを感じています。以前から患者会コアメンバーの方々から、スタッフ不足や次世代の担い手がいない苦労話をお聞きしておりました。私自身が効果的なご支援ができず慚愧の念に堪えません。

今まで相模原アレルギー患者会が相模原周辺地区だけでなくアレルギーの医療において多大の貢献をしてこられたのは言うまでもありません。患者さん目線での有益な講演会や広報誌は、全国に広めたい内容ばかりで、相模原病院医師や薬剤師、栄養士を中心とした講義は、手前味噌で恐縮ですが、Web や書籍では得られない、正しく新しい情報をいつも提供していたと思います。一方、時代は変化し、特に患者会の母体となっている成人喘息患者さんでの発作は減り、情報も Web などで得やすくなりました。

喘息医療における変革と残された課題

私が相模原病院へ赴任した 1990 年代後半は、毎夜の喘息発作入院があり、その対応で朝の業務が始まるのが日常でした。吸入ステロイドがその後普及し、その配合薬であるアドエア、シムビコートが 2007 年以降に上市されて以来、発作入院はほとんどなくなり、国内外で喘息死の顕著な減少が達成され、喘息医療に最大の変革がもたらされました。

第二の変革は現在進行中のゾレアに始まる 5 種の生物学的製剤（注射薬）が登場したことです。それらをうまく使用すれば、“純粋の喘息病態”はアスピリン喘息含めほとんど安定します。しかしいまだ治療薬が奏効しづらい一部の患者さん像は、「精神の関与が強い喘息」、「カビが原因」、「後期高齢者の方」、「多くの合併症がある方」などがあります。ただ私たちが臨床現場で最もよく経験するのは、正確な診断や病態把握ができていないために適切な医療を受けておられない方です。病態の正確な把握は、今でも医師の匠の技が必要と思います。もちろん高額な薬剤も現実問題として重要です。

患者さんも考えるべきご自身の治療

患者会が解散する今、私たちから情報発信する機会は減ります。そこで患者の皆様に意識していただきたいことが 2 点あります。まず、①アレルギーには原因探索とそれに応じた対応が大切であること、②十分な治療を受けておられるにもかかわらず良くならない場合は、診断や病態把握が適切でない可能性があること、です。すでに純粋の喘息病態はコントロールが可能な時代に入っています。特に②の場合は、薬剤の中止や変更を検討する必要があります。ぜひ主治医に相談し適切な指示を受けてください。また必要があれば、相模原病院のスタッフにご相談ください。患者の皆様の益々のご健勝を祈念し、感謝に代えさせていただきたいと思います。ありがとうございました！

-新年のご挨拶

臨床研究センター長

海老澤　元広

新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願い申しあげます。

過去 30 年余りの喘息などのアレルギー疾患の薬物療法の進歩とともに歩んできた NPO 法人相模原アレルギーの会ですが、この 3 月末をもって活動を中止されると聞いています。大変残念ですが、いままでボランティアで活動を支えてきて頂いた皆様に心より感謝したいと思います。私が相模原病院に赴任したのは 1995 年でしたが、当時小田原から相模原まで通われて活動を支えて頂いていた岩瀬さんのことが懐かしく思い出されます。当時は小児～成人まで喘息の管理がまだ不十分な時代であり、講演会も患者さん達の活気に満ちていました。薬物療法の進歩によりまずは小児から喘息の増悪が激減し，現在は成人でも生物学製剤が使えるようになり喘息発作で入院される患者さんが激減しています。その結果喘息は外来、特にクリニックで管理される疾患になってきました。

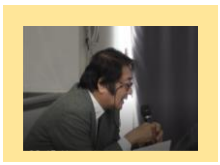
アトピー性皮膚炎に関してもステロイド外用療法一辺倒の時代から生物学的製剤や JAK 阻害薬などの全身治療の時代を迎え重症患者さんの管理に大きな変化が起きています。小児では喘息にかわって食物アレルギーが大きな問題としてクローズアップされていますが、最近はその流れが成人にも及ぼうとしています。スギ花粉症やダニアレルギーなどに対してアレルゲン免疫療法も皮下注射から舌下免疫療法にシフトして安全性や患者さんへの負担が劇的に改善しました。このような時代の変化に対応しながら今年も相模原病院がアレルギー疾患の中心院拠点病院としてしっかり活動していきたいと思っています。

横浜そごう　アレルギーの相談会にて。

2 列目左から 2 番目海老澤先生

思い出

相模原アレルギーの会思い出　清水氏、長谷川先生との鼎談
2013 年 3 月 2 日相模原グリーンホールにて。



会報「さくら」の 30 年

編集長：丸山　敬子

1991 年に会報「さくら」の第 1 号を発行してから、34 年余りがたちました。信じられない思いです。発行は 1 年に 4 回でしたので、3 か月に 1 と月ほどは大忙しの目にあうことになりました。私どもが会報で目指したのは「アレルギー疾患に関する正確な情報を読者の皆さんにお伝えすること」です。それも読みやすいきちんとした文章で。この目標はほぼ達成できたのではないかと思います。掲載する治療法も喘息なら気管支拡張の飲み薬から、ステロイド吸入薬、3 剤合剤、生物学的製剤(アトピー性皮膚炎にも)へ、花粉症なら舌下免疫療法へと進んでいます。

この 30 年は、IT の進歩と並走する年月でもありました。最初は個人用ワープロが出始めた頃。 皆さんの手書き原稿を初代編集長の遠山正慈さんがワープロで清書し、1 コラムごとに紙に貼りつけてレイアウトし、公民館のリソグラフ(謄写版)で印刷しました。続く 10 年は、ワープロ、パソコンが普及して原稿がフロッピーディスクで飛び交い、次いで 2000 年代に入ると、インターネットが使われるようになって、原稿やレイアウトはメールでやり取りする時代に。最近は Slack も使っていました。

「さくら」は内容も編集のやり方も大きく変わりました。30 年という年月の長さを、今しみじみとかみしめています。

～ありがとうございます。～

理事長：長谷川眞紀　事務局長：北島芳枝　副理事：丸山敬子：荒川潮乃　理事：馬淵和子：小川順治：
関野紀久夫　スタッフ：松下栄介：大内南：高梨淑子（つぼみの会）：瀬川美直子：藤原悠（HP 担当）
2024 年 2 月吉日作成